

【下関市総合教育会議議事録】

令和3年度第1回下関市総合教育会議

開催日時	令和3年5月27日（木） 10:00～11:30
開催場所	下関市役所 本庁舎西棟 5階 大会議室A・B
出席委員の氏名	前田 晋太郎（市長） 児玉 典彦（教育長） 小田 耕一（教育長職務代理者） 藤井 悦子（教育委員） 吉村 邦彦（教育委員） 佐々木 猛（教育委員）
欠席委員の氏名	欠席なし
委員、関係者及び傍聴人を除くほか議場に出席した者の氏名	総合政策部長 竹内 徹 教育部長 徳王丸 俊昭 教育部次長 光吉 計志 教育部次長 吉川 弘文 学校教育専門監 木下 満明 教育政策課長 岡本 誠也 学校教育課長 岡田 達生 教育指導監（生徒指導推進室長） 川畑 誠治 教育研修課長 岡 良治 学校支援課 浅野 秀晃 教育部参事（学校保健給食課長） 山本 泰造 生涯学習課長 和田 英一 教育政策課長補佐 内田 泰敬 教育政策課主査 倉前 啓介
傍聴人の数	2人

次第（目次）

【開会の宣告】	P 3
【市長挨拶】	P 3
【教育長挨拶】	P 4
【協議・調整事項】	
(1) 「希望の街・下関 学びの街・下関」	P 4
(2) 「ICT教育の推進（1人1台端末の活用）について」	P 17
【その他】	P 22
【閉会の宣告】	P 23

【開会の宣告】

徳王丸俊昭（教育部長）

皆さん、おはようございます。ただいまから、令和3年度第1回下関市総合教育会議を開会いたします。

まず初めに、総合教育会議の主催者であります前田市長に開会のご挨拶をお願いいたします。

【市長挨拶】

前田晋太郎（市長）

皆さん、おはようございます。まず、教育委員の皆様には、本日はお忙しい中、ご参加をいただきありがとうございます。何か、今日は、この総合教育会議、今日に至るまで、私、これまで経験がないくらい皆さんの熱意というか、やる気というか、情熱が伝わってくる、不思議な感じを覚えていたのですが、それはなぜかといういろいろ考えてみたのですが、いまコロナの状況である中、いまだからこそ教育に、子供たちのために力を入れていかななくてはいけないとか、いろいろあるのですが、一つは私も、3か月がたとうかということで、少し平時の状況にもどりつつありますが、先の3月の選挙においては、市民の皆様には大変ありがたいご理解をいただいて再任をすることができました。それ以降初の総合教育会議ということで、まず皆様方には、そういった意味でのご挨拶をさせていただきたいと思っております。引き続き、どうぞよろしく願いいたします。

選挙が終わったからといって、まったく情熱が落ち着いているわけではなく、むしろどんどんテンションが高くなっているくらいでございますので、引き続き皆さんと共に、子供たちのために議論を交わしていきたいと思っております。

今日は、テーマはいっぱいありますが、事前に用意されたシナリオはない、ということで、ガチンコの会議ということでございます。市役所の会議としては、非常に珍しいのですけれども、私が目指すところは、大体そういうところでございまして、そうしないと良い議論はできないといえますか、雑談の中から良いアイデアが浮かぶと、仕込まれ過ぎた会議からは、実はいいものが生まれてこない、という持論が自分の中にはありまして、教育委員会の皆さん、教育委員の皆さんにも、このことをよく理解してもらっているのだろうと思っております。そこで、キーワードは並べておこうということで、皆さんのお手元に配付した次第には、キーワードのみが並べられているということで、これだけあれば、かなりいろんなネタがあって、むしろ1時間30分では全然足りないということになるのではないかと考えているので、積極的なご意見を頂ければと思っております。

少し長くなりますが、本市においても、コロナの新規感染者が非常に多くなっています。1年半以上、経験してきて、私なりに分析していますが、過去最高に厳しい状況であります。きついのは、やはり保健部であったり、医師会、医療従事者、そして教育関係者もそうですが、子供たちも、第4波というのは、変異株が毒性が強いと言いますか、感染力が強いということで、コロナには子供たちはあまり感染しないとされてきた中で、子供たちの感染者も増えてきている、ということです。落ち着いて、今こそしっかりと、慌てず対応していくことが必要なのだろうと思っております。ワクチン接種についても、しっかりと対応していかなければいけません。私としては、年末、年度末には、下関が落ち着いた状態になるようにイメージして進めていきたいと思っております。今は、電話での受付がスムーズに進まない状態があって、高齢者やそのご家族の方から、大変厳しいご指摘をいただいておりますが、これは時間と共に落ち着いてくると思っております。できる限りの対応をしていこうと思っております。

この4年間のいろんな取組の成果が、この2期目にいろいろと出てくると思っておりますし、それに向けて抜かりなくやっていきたいと思っておりますが、教育についても、積極的な、子供たちの安心・安全を守りながら、基礎・基本教育の充実と、繰り返し申し上げていますが、何といたっても故郷にどうやって振り返っていただくかということです。これをテーマとして、軸として、これからも邁進していきたいと思っておりますので、温かいご理解を頂くをお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

徳王丸俊昭（教育部長）

ありがとうございました。続きまして、教育委員会を代表して、児玉教育長にご挨拶をいただきます。

【教育長挨拶】

児玉典彦（教育長）

それでは、教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症は、変異株が従来型のウイルスに取って代わったと報道されています。この変異株は、若い世代でも感染、重症化リスクが従来型より高いと言われており、学校現場では、これまで以上に危機感を強め、丁寧に対策を講じていく必要があると考えています。同時に、生活変容が求められている中で、維持すべきものは何か、そして変えていかなければならないものは何かを現場と協議・対話をしながら意識を共有しているところです。

さて、本日の協議・調整事項は2点あります。1点目は、前田市政の2期目がスタートした今、改めて前田市長の教育に対する思いを拝聴し、現状と課題を共有するとともに、その対策について協議することです。

2点目は、ICT教育の推進についてとなっています。

私も教育長として2期目となりました。市長と相談させていただきながら、教育委員会が一体となって、現場が抱えている問題・課題の把握に努め、「学びが好きな子ども」の育成と「学びの街・下関」の実現に向けて力を尽くす所存です。そのことが「希望の街」につながるものと考えています。

どうか前田市長におかれましては、「学びの街」実現に今後とも格別なご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。本日の私の挨拶に代えさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

徳王丸俊昭（教育部長）

ありがとうございました。それでは協議・調整事項に入ります。

これより、議事の進行を前田市長をお願いいたします。

【協議・調整事項】

(1) 「希望の街・下関 学びの街・下関」

前田晋太郎（市長）

それでは、議事をお預かりいたします。

教育委員会と市長部局の連携、意思の疎通をしっかりと図りながら教育行政を進めていくということが肝要だろうと思っています。教育委員の皆様方にも、しっかりとその点についてはご理解をいただいて、あるべき姿を目指していくということだと思っています。

今年、3月に選挙が終わって、4月議会、5月議会、6月議会と立て続けに議会を行いましたし、行う予定です。4月、5月は終わりましたが、コロナ対策、経済対策、6月はいよいよ、選挙前の予算というのは骨格予算といって、政策的経費が今年はまだ実は通っていない状態で、新しい市長のもとに政策的経費を通そうということで、6月にそれを行うのですが、その準備も大体終わりまして、あと議会での対応を待つのみとなっています。

4月議会では約8億円、そして5月議会では約15億円、6月が約27億円と、総額で50億円の予算を3か月の間に集中して形にしていくこととなります。非常に下関にとって大きなタイミングを迎えるということですのでございます。特に教育に関する予算は、6月議会で補正予算を組みますが、はっきり言って、これまでにない、異次元の教育に対する投資をしているという状況です。かねてから申し上げているとおり、子供たちの安心・安全な環境を守るために、例えば学校

施設が老朽化しているのは直していこうよと、先生からもしっかりと教育委員会に要望をあげてきてくださいよと、この4年間やってまいりましたし、少しずつではありますが、この辺りは進んできたのかなと思っています。やっぱり極め付けは、トイレの老朽化への対応です。これをですね、ピンポイントで毎年やっているのと、そのたびに財政に「ここの学校、こういう理由で古いからやってほしい」というと、「じゃ、こっちの学校はどうなんだ」と議論を延々とやっていかなければいけなくなってしまいます。これでは時間がかかるので、総合的に、小中学校でダメなところは直していこうと考えて、長期的な視点でトイレの改修をやっていこうという計画を教育委員会に考えてもらって、庁内で協議をして、いよいよスタートします。これ、スタートの予算は3,000万円くらいでしたか。そして、計画を立てて数か所ずつ、複数年、大規模改修をやっていくので、随分変わってくると思います。ICTやGIGAスクール構想などもあり、お手元の資料を見てのとおりでございますが、これらの一つずつ考えていこうということです。

まず、下関の伝統・文化・歴史を大切にしてほしい、というところです。皆さんから、いろいろとご意見をいただきたいと思っております。

いろいろな取組みをやってまいりましたが、あれは何でしたっけ。夏休みに研究発表をして、それを評価して、市長賞とか教育長賞とか選定して、教育センターで表彰をしましたよね。

児玉典彦（教育長）

歴史マップでしょう。

前田晋太郎（市長）

ああ、そうでした。歴史マップですね。ああいった取組もやってきましたけれども、何といっても、何故こういったことをするのか、という最終的な目標は、やはり故郷に、故郷というものを意識してもらって、人口減少とか、街が衰退して、下関も衰退傾向にあるものを何としても止めなければいけない。そのキーワードは、子供たちのそういった考え方とか、郷土に対する思いや誇りにかかってくると思っています。そこを、いまのうちにどう伝えていくことができるか、そして我々、教育を通じて、親・保護者に対する家庭教育も含めて、親に対する意識の啓発も含めて取組むことができるかということが、大きなテーマになろうかというように思っていますので、ここは徹底的にやっていく必要があると思っています。先程のお金の部分とはまた違った部分ですが、しっかりと取組んでいきたいと思っています。

もし皆さんの方でご意見がありましたら、お願いします。いかがですか。吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

本日はありがとうございます。いまの伝統・文化・歴史について、10万人当たりの高齢者比率が山口県がワースト4位であったということで、先日ニュースで聞きました。そういった中でも子育てしやすいとか、子供を育てやすい街、そういうふうなところで市として「学びの街」と「希望の街」ということで掲げている以上、ここをもっともっと我々教育委員会も含めて育てていかなければならないと思いますし、そういった中で、子供たちに下関の良さ、美味しいもの、歴史、それからいろいろな「維新のまち」と言われるだけに新しいことを生み出すには非常に智慧と知識がある街だと思いますので、そういったところをもっと踏み込んでいければと思います。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。どうぞ、藤井委員。

藤井悦子（教育委員）

そうですね、下関市の括りで考えると、身近なところに歴史的な物や場所があると思います。そのようなことを認識し、伝統や文化に理解を深めるきっかけになれば良いなと思いました。社会科の勉強や授業の一環で自分たちの地域を知ることが大切にしてもらいたいと思いました。

私が一つ思いましたのが、みもすそ川に鯨場というところがあります。何十年も下関に住んでいて知りませんでした。ここがクジラを解体する場所であったことを知り、非常に驚きました。

意外と身近なところに、そのような場所があることを知らない方が多いと思いますので、教育現場で地域のことを知る手助けができるような教育も必要だと思います。

吉村邦彦（教育委員）

もう一ついいですか。

前田晋太郎（市長）

はい、どうぞ。

吉村邦彦（教育委員）

私、美術館や博物館にほとんど行ったことがなかったのですが、先日、ようやく行く機会がありました。そのときに、学芸員の方や受付の方とお話をする中で、全来館者の中で子供の占める割合は非常に低いということでした。やはりご年配の方や遠方から来られる方が多いとのことで、本当はもっと学校が子供たちをそういったところに連れて行って学ばせるというようなことを考えるべきではないかと思いました。

前田晋太郎（市長）

はい、いま、藤井委員と吉村委員のご意見に共通しているところは、「知る」ということではないでしょうか。下関を知る、そして自分の生まれ育った地域を知る、ということだと思います。その中で、例えば遠くに行くということも、外を見ることも勉強でしょうけれども、地元の施設を有効に活用するということが大事なんだろうと思います。私もすごく共感するところがあって、「長々と散歩（ちょっとさんぽ）」という番組に最近ずっと出ているのですが、だいぶ市民の皆さんにも浸透してきたと感じており、一番楽しんでいるのは私だろうと思っていまして、あの番組に出るといつも怖いです。何故かという、行った場所が知らない場所ばかりに連れて行かれるんです。知っていたら「市長、どうですか」と聞かれて、説明できるけれども、説明できないような知らないところにばかり連れていかれるんです。彦島なんて、大正時代からお遍路さんをやっている、108か所のお地藏さん回りをして、地図ができていますね。大正時代につくられていて、弟子待にその地図があるんです。ああいったものって、学校教育に絡めるのは、先生方のいまの忙しい状況を考えてすごくきついただろうと思いますが、例えば、横のつながりで調整をかけて、複数校で、豊北町の人類学ミュージアムや豊田町のホテルの里ミュージアムに出掛けてみたらいいと思うんです。これらの施設は、真に下関の歴史を物語るものだということがよくわかると思うのです。こういった施設に複数校で行って、空いた担任は、今やれることを時間を作ってもらって取組んでもらって、学校の日頃できないような仕事に時間を充ててもらったり、休息に時間を充ててもらったりしてもいいと思うんです。そういった横の組み合わせとかも考えてもらったらいいのかなと思います。とにかく、知ってもらおうということ、これが重要だと思います。

あまり上から「やれ、やれ」と言うと、現場の先生方がしんどいだろうと思うので、先生方が自ら調整をしてもらえるといいのかなと思います。そういった取組を上は了承を与えるという、規制を外してあげるという考え方の方がスムーズなのかなという思いがします。

ほかにご意見はありませんか。佐々木さん、どうですか。

佐々木猛（教育委員）

いま市長が仰られたことは、大切なことだと思います。それぞれのまちの、それぞれの学校区内に、それぞれの良い場所、良い歴史があり、良い人たちがいらっしゃると思います。下関の地域の方々には、学校の先生方のご努力、ご尽力もあってのことだと思いますが、地域と学校の連携は非常にとれていると思います。そこを活用して、子供たちを、いかに地域に認められる大人として、子供として、人間として送り込むことができるか、というところに注力していくべきと思っています。実際問題として、例えば、いまはコロナ禍で難しいかもしれませんが、お祭りなどに積極的に子供たちが準備から参加する、これを学校の先生の手を借りるのではなく、先程家庭

教育の話がありましたけれども、家庭の力、保護者の力でもって誘導していく、そして、子供たちがそこで活躍する、それを地元の大人たちが子供たちを支えていく、ということによって、私達保護者にしても、子供たちにしても、地元のおじいちゃん、おばあちゃん、大人の方から認められる存在にしていく必要があると思います。子供たちをその中で育てていく必要があると思います。地域学校連携活動というところ、この後の話にもなってくると思いますが、例えば、まちづくり協議会とか、という話もあります。その各地区のまちづくり協議会の中にも、こども部会、こども育成部会とか、そのような名前の部会等もあるかと思っています。私達保護者とそのまちづくり団体とそして子供たち、そして学校の先生という形で連携をして、先ほど言った複数校でそういった所に行ってみようだとか、先生の手を使わずに誘導していこうとか、そういった形で発展させていけたらと思います。

吉村邦彦（教育委員）

いいですか。

前田晋太郎（市長）

どうぞ。吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

今の話に少し付け加えさせていただきたいのですが、一つ目が、このコロナで伝統とか、いうことがどんどん中止されたり、先送りされたりしています。馬関まつりもそうですし、いろんな行事とかも中止とか、縮小・先送りされたりしている中で、本当にこのコロナが終息というか、もうここからは元通りの生活に戻そうよとなったときに、本当に戻ってくるのかどうか。特に地域の小さなお祭りとかは、本当に復活できるかどうか、非常に心配しています。今言うまちづくり協議会も、これかなりたくさんの税金を投入されていると思いますが、そういったお祭りとかを必ず復活させるとか、先程の話ではないですが、子供たちと一緒にまちをつくっていくというところは、ある意味、一つの項目として、ミッションとしてそこに盛り込む、どちらかという税金が入ってきて、それからどういうふうになっているかというところが非常に多いように感じていますが、これは非常にもったいないので、そこはよく市と色々な話をして、コーディネーターの方も入られているので、そういったものを上手に使って行けばいいのではないかと感じました。

前田晋太郎（市長）

なるほど、ありがとうございます。いまのお二人の話だと、地域性、そしてPTAとかですね、コミュニティスクールとか、いろんな既存の組織、まちづくり協議会とかをうまく組み合わせて、アフターコロナに向けて、折角ある予算をどう有効的に使って、伝統を維持していくか、復活させるかということに、子供たちの自信をつけさせることにつなげていくかということだと思えます。とてもいいことだと思えます。新しいものというのも、新しいものがすべて良いわけではなくて、どちらかという歴史の街・下関なので、昔あったものを、いまのパワーで復活させるとかね、子供たちや地域主体となってやっていくということが、本当にエネルギーが生まれていくと思えます。

火の山を今度やり替えるのですが、私はアスレチックを復活させたいとずっと言っているんです。かつてあったじゃないですか。ああいう以前あったものを復活させることで、元気なころの下関を目の当たりにして、市民が自信を持てるんじゃないかなとか、そういったことを考えています。今の話は、本当に大事なことだと思えます。ありがとうございます。

ちょっと時間の関係もありますので、「生き抜く学力の保障」に移りたいと思います。

「生き抜く力」ですが、結局、私は、究極のところ教育とは何かということ、子供たちを安心安全に導くということではなくて、お父さん、お母さんが、例え明日もし死んだとしても、力強く生きてくれる、生きてほしいと願うのが、親の本当の心底のところだと思っています。極論ですが。これを言うと嫌がる人もいますが、現実、そうだと思っています。だから、安心安全な、

言葉は悪いですけども、無菌状態で保護していくのではなくて、多少は危険も教えていく。刃物の扱い、刃物が危険だから刃物をあえて持たせるという考え方というのを、私は古いかも知らないけれども、すごく大事だろうと思っています。そういう意味で「生き抜く力」チャレンジ、力を醸成するためのキャンプ活動とか、取組をやったり、学力をしっかり、だから勉強しないとダメなんだよと、勉強も必要なんだよということを教えてあげるのが、我々の仕事なんだろうと、いうふうに思っています。皆さんからもいい意見をいただいて、これについても、しっかりと各学校と共有できるようにしたいと思っています。

小田委員、教育長職務代理者への再任、おめでとうございます。引き続き、お世話になります。

小田耕一（教育長職務代理者）

引き続き、よろしく願いいたします。

前田晋太郎（市長）

それをいったら、児玉教育長もそうなんですが、ちょっと一部議会で議論が出ましたけれども、私が蹴散らしておきましたけれども、あれは、児玉教育長がバシッとやってくれたから、それを善しとしない人たちが、一部がですね、異論を唱えているだけで、全然気にされずに、どんどん頑張っていたきたいと思います。

ということで、話がそれましたが、小田委員、これについてご意見をお願いします。

小田耕一（教育長職務代理者）

生き抜く力ということですが、各学校でも体験的学習というのを大変重視しています。教室で勉強したことを校外で試してみるとか、新しい発見を外に求めるとか、そういったことをこれまでも取組んできていますし、これからも体験的学習を充実させていくことによって、驚きとか、感動とか、それから自分を見つめ直すとか、そういうふうなことから生まれてきて、学ぶ楽しさを見つけることにつながっていけばと思っています。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。児玉教育長はどうでしょうか。

児玉典彦（教育長）

いま体験学習について、小田委員が発言されましたが、もう一つ私が大切だと再認識したのが、この度、文関小学校が読書活動の部門で文部科学大臣表彰を受けることになりました。この文関小学校の取組を見ていると、子供たちが本を読みたいと思わせるような仕掛けがあちこちに散りばめられているのです。そういう中で、子供たちが読書を好きになるということが、生き抜く力の出発点になると。本を読むことと体験、この両方が学校の中でうまく展開されるといいなと私は思っています。

前田晋太郎（市長）

読書と実体験の両方ができると、単なる知識の詰め込みではなく、生き抜く力になると、そういうことですね。

はい、小田委員。

小田耕一（教育長職務代理者）

私の申し上げたいことを、教育長が十分にフォローしていただいたと思います。体験的なことと、それから教室でする学問と、そして文学を通して学ぶこと、そういった驚きとか、感動とか、そういったものが学ぶという姿勢につながって行って、学び続けるということが生き抜くこと、自分を成長させることにつながっていくと、教育委員会では、いつもそのスタンスで事業を行っていると思っています。ですから、学び続けるために、感動のあることとか、自分を見直すこととか、そういうことを続けて行って、そのことが生き抜く力に繋がっていくのではないかなと思

っています。

前田晋太郎（市長）

なるほど。はい、どうぞ、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

いま小田委員と教育長が言われたことをベースにして、やはり智恵が必要だと思います。知識も必要ですし、智恵も必要です。その中で、やはりチャレンジするということは、こういったご時世ですから、なかなか子供たちにチャレンジさせて、達成感を味わうということが非常に少なくなっている気がします。先程、市長が言われたように、もっともっと子供たちが自然の中で、たくさん下関には自然もありますし、そういった中に、心も体も痛みが分かるような子供たちに、我々大人が、そういったことを子供たちに教えてあげるようなことができればいいなと思います。

あと、智恵を身に付けたら、人間は先のことを考えるので、先のことを考えると、そこにどうやって生きていくのかということ、必ず生まれてくると思います。まずはチャレンジしてもらうこと、どうすべきなのかということ。学校で、学問というか、座学ということよりも、もっともっと想像する、考えるということ、やはり今から世の中に出るときに、そこが非常に大事になってくると思います。そういうことに子供たちが接することができればいいなと思います。理想論なんですけれど、申し訳ありません。

前田晋太郎（市長）

いえいえ、すごい大事なところですね。はい、藤井委員。

藤井悦子（教育委員）

確かな学力を養うためには、それなりの教育が必要だと思いますが、私は、心の面をもっと大事にしていかなければいけないと思います。人間社会の中で生き抜く力というのは、重要であり、それは我慢強く、思いやり、協調性、好奇心が旺盛であり、そして自己肯定感が高いことだと思います。幼少期の幼稚園や未就学の子供たちにとっては学力より重要な要素だと考えており、幼稚園の先生方には力を入れて教育していただきたいと思います。しかしながら、現状では、先生の人員が足りていないと思います。小学校に進学すると、子供たちは自ら集団生活の中で成長していくと思いますが、幼少期の子供たちは、それぞれ個性が出てくる時期であり、幼少期の教育で生き抜く力の基礎を養うことが必要だと思います。

前田晋太郎（市長）

未就学の子供たちへの対応ということですね。それもしっかりとやっていかなければいけませんね。私が、皆さんのお話を聞いて思ったのは、選択肢を子供たちに与えることって、すごく大事だなと思いました。いろいろなことを経験させて、体験させて、学校の机の上も大事なんだけれど、感性を豊かにしてあげることが、判断力であり、決断力であり、危機を回避する能力であり、予測力であり、準備力であり、そういった能力を身に付けてあげることが大事ですね。1番の話にも通じるんですが、いろんな地元のものを見させて、経験させて、だから、そうするとカリキュラムの時間割をですね、これ、文科省のルール、基準によって、勉強する時間というのが決まっているんですかね。そこをぶち破ることはできないんですかね。

木下満明（学校教育専門監）

乗せることはできますが、削ることはできません。

前田晋太郎（市長）

その調整ができるようになるといいんですけどね。そこが教育改革ではないかと思うんですけどね。地方発の。難しいですけどね。

先程の豊北町の人類学ミュージアム、そこには、どれくらいの子供たちが行ってるんでしょう

か。

徳王丸俊昭（教育部長）

修学旅行などで市外からの児童生徒の受け入れは結構あります。地元の児童生徒につきましても、社会学習などで利用しています。

前田晋太郎（市長）

例えば、彦島の子供たちが見学したりできているんでしょうか。

木下満明（学校教育専門監）

昨年度は、コロナ禍で、これまで市外に社会科見学に出ていたものを市内で行うようになりました。私は、豊田町に住んでいますが、ホテルの里ミュージアムは結構盛況でした。私は、昨年度は熊野小学校に勤務していましたが、ホテルの里ミュージアムに社会科見学の申し込みをしたら、候補日がすべて他校の見学予定が入っていて断られました。実際の受入件数は、いま数字を持ち合わせていませんが、結構市内の方が目を向けられているのかなと思います。

前田晋太郎（市長）

いま出た意見は、それぞれに着眼点は異なりますが、向かっている方向は同じなのではないかなと思います。教育委員会の皆さんには、またまとめてもらって新たなアイデアがそこから生まれてくればいいなというところです。

それでは、いじめの話に移りたいと思います。「いじめゼロでいくよ」と、引きこもりも声をかけて是正をしていこうということで、取組んでまいりました。そうはいいながら、子供たちの日常生活の中でいろいろあるんですね。私も子供が3人いる中で、いろいろちょっと大変だった時期もあります。学校も良く対応してくれました。重大案件については、教育長、市長まで報告が上がってきて、対応について協議するスキームもできていますので、大事には今のところなっていません。ということで学校や教育委員会はよく頑張っていると思っていますが、そうはいつでもまだ案件がゼロになっているわけではありませんので、これをどうやって対応していくかということなんです。ご意見がありましたら、お願いします。

佐々木委員、どうぞ。

佐々木猛（教育委員）

いじめ・不登校のない学校づくりというのは、こう言ったら怒られるのかもしれませんが、私の個人的な意見では、ゼロはまずないと思っています。社会全体においてもゼロはないと思いますし、学校においてもゼロはないと思います。ただ、1件でも少なくすること、これは必ず取り組んでいかなければいけないと思いますし、目指すところはゼロであるという旗を掲げていく必要はあると思います。その中で、過去のいじめの案件をいろいろ確認をさせていただく中で、一番大きな要素は、保護者の問題だと思っています。子供同士のいざこざから大きく発展して、大人がそこに介入してきて、ボタン掛け違えを大きくしているような気がしています。冒頭に、市長が家庭教育について言及されましたが、やはりこれについても家庭教育をしっかりさせること、そして保護者同士のつながりをしっかりと構築すること、これによっていじめの件数が下がっていくのではないかと考えています。

不登校に関しては、不登校の原因にはいろいろな要素があると思います。私も、不登校の方々の取組を一時期関わったことがあったのですが、私もまだまだ勉強不足もあって、ハードルが高かったです。その保護者とは、とても仲が良かったのですが、最後には「大きなお世話」と言われてしまいました。「分からないですよ。我々の気持ちは。」と。そこは心の問題でもあるし、いかにその中に入っていくことができるのかというところは、SC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）などと連携して、しっかりとつかんでいかなければいけないと感じました。

前田晋太郎（市長）

さすがPTA会長を長年されているだけあって、いろいろと経験されているんですね。私も長男が、ちょっと教室の中でトラブルにあって、しばらく引き摺った時期があったのですが、原因がいろいろと見えてくると、親が問題だということが分かります。親が出てきて、親が分かっている傍観している、子供にももの言えない親が増えている、「うちの子は悪くない」と言って出てくる親、その逆もありますね。ここは子供同士で収めておけば、ということ、それが放っておいたらどういう問題になるんだと、それを心配して出てくるわけですが。ですから、親にその意識を伝えていくということは、非常に難しい。教育の最大のテーマの一つではないでしょうか。

はい、どうぞ、佐々木委員。

佐々木猛（教育委員）

そういう意味で、親同士のつながりをいかにつくるのか、ということ各学校で努力すべきだと思うし、またPTAも含めて努力すべきだと思います。実際問題として彦島中学校では、家庭教育支援チームをつくって、熟議だとか、一つのテーマについて親に自由に来ていただいて話し合いの場を持つようなところを一生懸命に取組として進めています。これを各学校で、PTAを中心に取組を進めることができればいいなというふうなこともあったので、今年度、市PTA連合会の会長には、こんなことを推奨してはどうかと提案させていただいたところです。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。はい、小田委員、どうぞ。

小田耕一（教育長職務代理者）

いま保護者の方の対応についてお話がありましたが、学校の方としては、昨日も教育委員会の定例会の際に教育長からお話を聞かせていただきましたが、学校における教育相談を何のために行うかという、学校が安心できる場所であるということをお子たちに意識してもらえるようにするためであるということ、それから相談の中で子供たちを元気にすること、ですから安心できる学校と子供が元気なということが2つの柱だというお話がありました。子供たちからのサイン、子供たちの様子を見て、早期にその対応ができるということ、教育相談、教育委員会、そして学校においてしっかりと取組んでいると思っておりますが、これを続けていくしかないと思っています。学校の方の話をすると、そういったことになると思います。

前田晋太郎（市長）

はい、教育長、どうぞ。

児玉典彦（教育長）

いじめ・不登校の問題は、家庭の事情や特別支援教育が必要な状況など、いろいろな要素・性質をもっています。不登校について、私が一番心配しているのは、不登校の子供がそのまま大人の引きこもりになったときに、社会に引っ張り出してくることは非常に難しくなりますし、社会全体にとってもマイナス要因になるということです。教育支援教室「あきね」について市長のご理解をいただきましたので、これからしっかりと進めていこうと思っているわけですが、不登校対策には力を入れていくべきだと、そういう市長からのゴーサインをいただいたので、是非これには市教委をあげて取り組んでいきたいと思っています。

前田晋太郎（市長）

そうですね。いわゆる「第2かんせい」ですね。この度の6月議会で予算承認をいただくわけですが、勝山老人憩いの家があったんですけれども、地元の方々がもう面倒をみきれないから、もう要らないと手放されて、空いた施設があったので、そこにうまく今回、教育支援教室を入れていこうというものです。「かんせい」が、対象児童が非常に増えてきて、1か所しかないから、もう1か所増やそうということで、これは待たないでやらなければならないということで、議会で予算

の承認をいただければ、夏くらいからですか、スタートできるのかな。ここは非常に期待したいと思っています。

教育長が言われたように、不登校の子供たちを、どう引っ張り出して、皆で声を掛け合っていくのかというところは、非常に大事ですし、皆さんからもまた、いろいろと意見を頂ければと思います。

各学校で、そして地域です、そういう問題解決に向けて、市民の皆さんが少しずつでも意識を持ってもらうことで、優しい地域づくり、優しい下関市になっていくのではないかと思います。

まだまだご意見をいただきたいところですが、テーマも多いので、次に行きましょうか。

学校教育については、小中一貫教育の推進、適正規模・適正配置、ICT教育の推進、インクルーシブ・ギフテッド教育など、いろいろと取組を進めているところですが、小中一貫教育の推進については、いろいろと内容の見直し、計画変更をしながら、だいたいまとまってきたかなと思っています。学校の統廃合と併せて、進めるところは進んできていますので、市民の皆さんにも関心をもって見ていただきたいと思います。

子供たちの集団教育をしっかりと行っていくということは大きな柱なのですが、地域性というものが絡んでくるので、例えば、内日地区などは、計画変更をした例ですが、内日の学校をなくして、菊川と勝山に分散をさせようとしたら、内日には人が住まなくなってしまうと。新しい家が建たなくなってしまうと。それを今回戻したんですかね。小中一貫校をやろうということで、計画変更をしたんですが、それだけで最近新しい家が建ち始めたとのことでした。若い親世代が考えることというのは、そういうことなんだろうと思うんですが、次のテーマとして就学前の施設とかも戻せないかなと思っていますが、民間の力なども借りながらできないかなと思っています。

そういったことで、新時代というか、人口減少と高齢化の厳しい数字が突きつけられている下関で、それを食い止める施策は一方でやりますから、40年前、50年前の学校を取り巻く状況とは違うわけですから、進めるところはしっかりと進めていかなければいけないと思っています。

皆さん、いろいろとご意見があろうと思いますので、お願いします。はい、どうぞ、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

小中一貫教育に関しては、少子化の時代ですから、継続的な学びの環境維持のために早急に取り組むべきと思っています。ここは地元の方々の協力を得ながら、当然必要になるところも出てくると思います。そのときに、他の市町村でも同じように取組を進めていると思いますが、下関市として、こういったことにチャレンジをして、全国に先駆けて、モデルになるようなことができればいいのかと思っています。教育委員会の中で意見を出し合っていかなければいけないと思っています。

それから、適正規模・適正配置については、小中一貫とは相反するところも出てくるのかなという気もしますが、最低9年先を見越して配置を検討する必要があるのではないかと思います。そういった中で、課題としては、適正配置にしたときに廃校又は休校となったときに、跡地利用というのが、まちづくりを考えた時に学校という存在が大きかったものが急に穴が開いたような気がします。そういうところは、行政の縦割りで、教育委員会が管理しているところを、市として、いろんな法律や制度の縛りなどがあると思いますが、地域の方と協力をして、学校跡地が有効に使えるように配慮をしていただきたいと思います。以上です。

前田晋太郎（市長）

吉村委員から、事前にご意見をいただいておりますが、机上に写しをお配りしていますが、各般にわたって詳細にご意見を頂いております。まだまだ言い足りないところもあるんだろうと思いますが、小中一貫教育については、だいたい姿が見えてきたというか、目指す道筋が見えてきて、例えば、先日も協議しましたけれども、吉見・吉母・蓋井地区ですね、これも大体、進むべき道の整理はできてきたのかな、と思っています。蓋井の子供たちが今後、少し人数が増えるので、その子供たちが本土の方に泊り掛けで来るような施設を整備するのか、島の小中一貫校で対応するの

か、という協議を重ねてきて、小中一貫校で行こうということで決めました。蓋井島で完結させようということで決定しましたので、これは地元の了解も概ねいただきましたから、これで行けるだろうと。吉見・吉母は、吉母が少し離れていますので、しかも、いま児童数が7人でしたか、そういう状況なんです。県内で見ても、最も規模の小さな学校となっています。でも、地元の方々は、学校を存続させたい、と。親の意見を優先させようよ、と。やはり、私は、保護者と当事者の問題意識を一番重きを置いてあげたいというところがありますので。地域は、学校がなくなるといふことに、すごく抵抗があるわけです。地域が廢れていくのではないかと。だから、なかなか進まなかったのですが、そこは勇気をもって、政治的な意味も含めて解決に当たっていく必要があるかなと思っています。

大きな計画・ビジョンについては、見えてきたのかな、と。あとは一番重たいのは、文洋中学校と向洋中学校の統合の問題で、それを新設でいくということ、旧神田小学校跡地を利用する案ですね。これも大きなチャレンジとなりますし、吉村委員が言われたように、跡地をどうするかということを目標に、そこもこの問題の根幹にあると思います。向洋地域は、いまから大きな総合体育館も3年後に建設されて、あのエリアをスポーツと文教の中心地として復活させたいと思っています。その中に向洋中学校の跡地を活用したい。これは国の土地もありますので、ちょっと複雑なのですが、有効利用して、街の元気につなげていくということです。そういったこともあります。これが私のこの4年の任期の中に意思決定ができればいいなと思っています。

ほかにもICT教育、インクルーシブ、ギフテッドなどがありますが、まずICT教育については、これはGIGAスクールとは違う意味合いなのですか。

児玉典彦（教育長）

GIGAスクール構想のもとで、いろいろなICT機器が学校において整備されました。それらをどのように活用していくのか、ということが今後課題となります。この活用状況といいますか、それをこのあとビデオで紹介します。また、後ほど市長にもご意見を伺いたいと思います。

前田晋太郎（市長）

それでは、ICT教育については、また後で話をしましょう。

では、インクルーシブ、ギフテッドについて、ご意見がありましたら、伺いたいと思います。はい、どうぞ、小田委員。

小田耕一（教育長職務代理者）

インクルーシブ教育といわれて久しいのですが、ICTの世界でも個別最適化とか言われますが、一人ひとりに合った教育を展開するということが、インクルーシブ、つまり包み込んで、障害のある人も健常の人も同じ場でということの基本として学んでいくというためには、一人ひとりの個性を大切にしたい教育ができる環境が基本だと思います。

いま、小学校、中学校にも通級による指導というのが行われていて、通常の学級に在籍するけれども、状況に応じて、その子の必要とする教育を個別の場で提供するという、そういった通級の指導というのが行われています。

現在では、高等学校にも、その制度が入ってきて、学びの継続、個別に勉強してきた、自分の特性に応じた教育を受ける方法を、高等学校の年齢段階でも行っているという時代になっています。やはり一人ひとりに応じた教育、一斉画一的な指導の場でも、誰もがそのことを、いま主体となって取組んでいけるような授業を作っていくということ、いま学校の先生方は苦心しておられるところだと思います。インクルーシブ教育は、私は進んできていると思っています。必要なことだと思いますし、10年、20年前と比べれば、先生方の意識もすごく高くなっていますし、学校全体の意識、取組も非常に進んできていると思います。

ただし、これからもずっと学び続ける先生でないと、子供たちの個別の特性というものが、増々多様になってくるということも考えられますので、先生方、それから教育委員会も含めて、学び続けていかなければならないと思います。以上です。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。

どうぞ、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

いま小田委員が言われたことに付随するのですが、インクルーシブに関しては、私は、下関市は、市長の掛け声といいますか、市長の思いで、一步一步ではありますが、着実に前に進んでいると感じています。いま話にもありました「かんせい」であるとか、これから開設される「あきね」とか、こういったところも含めて、それぞれの子供に合った、障害のあるなしに関わらず、一緒に学ぶ場所、一緒に学ぶ仕組みをいろいろと考えて、進めてこれていると思います。

ギフテッド教育に関しては、なかなか難しいと思っています。ケース・バイ・ケースで、数学だけ秀でた子がいたとして、本当に飛び級・進級させるのか、いろんなケースがあると思いますが、下関市としてどういった形が当てはまるのか。

あとは不登校の子供に対しても、実は非常に勉強ができる子で、ちょっとしたきっかけから学校にいけなくなってしまった子供もたくさんいると思います。逆に、家でパソコンをずっと触っていて、システムを組めるような子供とかもいたりして。だから、このあたりも難しいし、過去になかなか成功した事例がないと思います。いろいろと調べましたが、この辺も下関市でどういうふうに進めていくのか、コロナ禍でもありますが、教育理論も含めて、いまから模索をしていかなければならないと思っています。

時代の流れとして、このインクルーシブ、ギフテッドというのは、取組んでいかなければならないものですから、我々もしっかりと勉強して、何が最適かということを考えて行こうと思っています。

前田晋太郎（市長）

いろんな子供たちが、ハンデも含めて、様々な適性を持っている中で、インクルーシブという言葉が世に広まったのは、特に下関の場合は、下関市立大学ですね、インクルーシブにおける特別専攻科をいよいよ設置するところまでできましたので、それに合わせて、インチャイルド、つまり子供たちの特性を数値化することで対応する、幅を広げていこうということですが、それを学ぶ保護者の方も非常に増えてきています。市立大学の韓昌完（ハン・チャンワン）先生が頑張っていますが、彼はいま市立大学の改革の方に忙しくなってしまうと、本来のインクルーシブやインチャイルドの方も頑張ってもらいたいという思いも調整していますが、そういったことで、まだまだ下関では、特にインクルーシブはやっていかななくてはいけないと思っています。仲間も増えていくと思いますので、ぜひ教育委員の皆さんにもお力添えをいただきたいと思っています。

ギフテッドも、特化してやっていくということは、なかなか難しいのかなど。吉村委員も慎重なご意見を述べられましたが、私も近い感覚を持っています。ただ、個性を伸ばすということは大切ですし、磨いてあげることができれば素晴らしいことだと思います。公共ですべてできることでもありませんので、民間の力をお借りするのか、こういったことも含めて、時間をかけながら、いろいろと考えていきたいと思っています。

時間は大丈夫ですか。次は、コミュニティ・スクールについてですが、いまコロナ禍で地域との連携がなかなか進まない状況にありますので、いまはストックする時期だと考えています。あれもやっておけばよかったな、これもやっておけばよかったと、そしてコロナになって、私こんなことやっています、といろいろとフォーカスされて、マスコミで取り上げられたりしていますので、そういう人たちの活動をチェックして、メモして、ストックしておく時間にしてほしいと思います。そして、コロナが終わって動けるようになったら、あの人にアクセスして、アポイントして、子供たちを繋いでいこうとか、いろんなことができると思います。今は我慢の時期かなと私は思っています。

スーパーシティ、スマートシティについては、これは今日、竹内総合政策部長が来ていますが、かなり下関市は力を入れてやっています。会津若松市で成功事例があって、その成功を仕掛けた会社がアクセンチュアで、これは日本を代表する企業なんですけど、この会社が次は下関で、とい

うことで来てくれて、既に契約して事業を進めています。じゃ、学校で何がやれるのかと考えた時に、要はAIとかICTを使って社会人の仕事の量を軽減させようということなんですが、例えば、先生が毎日子供たちに授業をして、テストの採点をして、日誌のチェックをしてコメントを書いて、夜遅くまで仕事をして、また次の日を迎えるわけです。そうすると忙し過ぎて、児玉教育長がよく仰ることでありますが、いじめの原因は、先生の仕事量が多すぎて、子供たちに目が行き届かない、余裕がないところから生まれている、ということですが、先生の仕事もICT、タブレット等を活用して減らしてあげないといけない。じゃ、日誌とかテストの点付けとか、機械で自動化できるものは機械に任せようではないか、という考え方があるんですね。それを、最大手の企業の皆さんにご協力をいただきながら、下関でもじわりじわりと進めていこうと。で、先生の仕事を削減して子供たちと向き合う時間を作りましょうよと。そういうことが目標になっていくと思います。そんな感じですかね、竹内部長。

竹内徹（総合政策部長）

そうですね。広い範囲で、民間企業も含めて、どのような形でやっていくかというのを構想としてやっています。教育としては、とりあえず今年の「きらめきネット」を学校と保護者の連絡手段として、より広範囲な形で使える形での改修を考えています。

前田晋太郎（市長）

きらめきネットですね。メールで保護者にお知らせするシステムですね。それを進化させていこうかなど。いろいろとやっていますので、土台がきちりとした段階で、また皆さんにご報告させていただき、皆さんにもご意見を頂ければと思っています。

最後に、コロナ対策についてですが、大変な中で皆さんにご協力をいただいて、頑張っていると思います。昨年、こんなに感染者が出ていたら大騒ぎになっていたと思うのですが、我々が慣れてきたというのがありますが、割と静かに、冷静に対応していただいている印象です。どうですか、教育委員会の皆さん。保護者の反応とか。

岡田達生（学校教育課長）

去年のようなことはありません。

前田晋太郎（市長）

やはり慣れてきているんでしょうね。どうですか、教育委員の皆さん。対応をもう少しこうした方がいいのは、とか市民からご意見を聞いていませんか。

ぱっと出てこないというのは、割と落ち着いているということなんだろうと前向きに捉えませうけれども。

児玉典彦（教育長）

いまは学校において陽性者が確認された場合には、まず3日間、臨時休業することとしています。その3日間で安全が確認できたら、学校を再開することとしています。安全確認ができなければ、休業を延長することとしています。それをスタンダードとしていますので、学校も混乱することがないと思います。

前田晋太郎（市長）

そうですね。そういったガイドラインと申しますか、対応の仕組みがしっかりと定着したのだらうと思います。それが安心感に繋がっているのだと思います。

あとは何ができますかね。あとは情報発信、だから、きらめきネットをしっかりとその対応等で使っているのだと思いますが。どうですか。

徳王丸俊昭（教育部長）

そうですね。

前田晋太郎（市長）

きらめきネットは、すべての保護者の皆さんが利用してるのでしょうか。

木下満明（学校教育専門監）

9割を超える保護者が利用しています。学校によりますが、学校で登録をお願いしています。

前田晋太郎（市長）

現場で困ったこと等はありますか。はい、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

きらめきネットですが、新しいシステムがスタートをするわけですが、将来的には、私学がやっているように、各個人とつなげるようになればいいなと思っています。例えば、我が家は、息子が私学に進学しましたが、成績表も全部、直接保護者のスマートフォンに送られてきます。それから毎日配付されるプリント等もデータで送られてきます。どうしても小学校高学年の男の子などは、ランドセルの底からくちやくちやになったプリントが出てくるという経験があると思いますが、それがなくなります。学校とのコミュニケーションがより近く、スムーズになります。そういったことを将来的な目標として目指していければいいなと思います。

前田晋太郎（市長）

まさにうちの話ですね。出てこないんですよ、プリントが。一番下の子が。長男は、高校に進学して、はじめて高・中・小にそれぞれ在籍する形になっていますが、プリントがよく分からない状態になっています。入学の手続きとかも含めて。どこからのプリントなのか。末の子はだいたい置き去りになっています。

良し悪しもあるのでしょうか、スマートフォンで手元に届いた方が、いまやいいのかな、というのもあるし、うちの妻には届いたけれど、机の上に置いてあったら、お父さんも見ていたけど、代表者のスマホの中に届いてしまうとお父さんは見れないとか。転送してくれる仲の良い家庭であればいいのでしょうか。

吉村邦彦（教育委員）

それは、お父さんにも登録をしてもらえばいいんです。

前田晋太郎（市長）

そうか。そういうことができるようになるのかな、これから。

竹内徹（総合政策部長）

いま教育委員会が考えられているのは、基本的にはID管理をしまして、一旦、学籍簿と突合をすることによって、お父さん、お母さん、お祖母ちゃんも、ホームページ上で、ある学校の保護者のお子さんの情報というのは、学年が上がって、クラスが変わったとしても、固有のお子さんの情報にアクセスすることができる、というものです。ですから、メールではなくて、ホームページ上でID管理を考えていますので、将来的には、吉村委員が言われたようなことはできる環境は整えることができます。

前田晋太郎（市長）

欲しい情報を欲しい人がとれるような環境が整えられるということですね。

竹内徹（総合政策部長）

そうです。ID登録をしなければ、一般的な学校行事とかを普通に学校のホームページ上で見るという使い方もできますし、個別の連絡は、IDを登録した方にだけ、お子さんに紐づけられた情報として見ていただくことができるようになります。

前田晋太郎（市長）

なるほど。はい、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

ありがとうございます。将来的には、相互コミュニケーションということが非常に大事になってくると思いますし、やはり個別に情報のやり取りができるということが大切だと思います。そこを目指していければいいと思います。

そうすることで、先程の話ではないですが、先生方の仕事を減らすことにもつながっていくのかなと思います。その結果として、先生方が、一人ひとりの子供たちに注目することができるようになれば、これはすごく大事だと思います。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。

【協議・調整事項】

(2)「ICT教育の推進（1人1台端末の活用）について」

前田晋太郎（市長）

さて、GIGAスクールの取組が4月から始まりまして、2か月が経とうとしています。皆さんも注目されていることと思いますので、ここに時間を割きたいと思います。

協議・調整事項の「2. 教育振興基本計画（教育大綱）の進捗状況について」についてです。

令和3年3月までの「環境整備」のフェーズから今年度の「活用促進」のフェーズへと移行変わることを踏まえ、今年度の総合教育会議においては、2回にわたって1人1台端末の活用促進について協議をしてみたいと思います。

今回は、端末の整備状況と現時点の活用状況等の情報共有を行い、次回、11月に開催を予定しております第2回総合教育会議では、具体的な活用環境について協議をしてみたいと思います。

いまから映像を見せていただけるということですね。

うちの子がですね、うちの子の話ばかりしてはいけないんでしょうけれども、末の子が、学校のICTの状況をこまめに報告してくれるんです。iPadで何をしたら。学校が楽しいとか言い出して。今まで嫌々で学校に行っていたのに。真ん中の中学校の女の子は、まったくiPadを使っていないようです。これ、先生によって、得意不得意があって、当然あるだろう、それは分かっていたんですが、その辺りの差があることも含めて、現状がどうなんだろうかということ、いまから皆さんと見て、そして腰を据えて協議をしていかなければいけないと思っています。

では、担当課の方から説明をしてもらえますか。

岡良治（教育研修課長）

教育研修課です。3月末までに、先程からありますとおり、1人1台端末が導入されて、現在は、それに慣れる期間と位置付けて、準備期間と考えております。まずは使ってみるということから始めているところです。中には、ICT機器に堪能な教員もおります。授業にどんどん活用している学校もありますので、積極的に使っているという学校の様子をご覧いただきたいと思います。もちろん最終的には、すべての教員が授業で活用するということを考えています。見ていただいたらわかると思いますが、子供たちは端末の扱いに慣れるのが、やはり早いです。新し

い学習用具ということで使って、楽しそうに、そして意欲的に使っている様子が見られると思います。それではご覧ください。

吉村邦彦（教育委員）

子供たちのICT機器の整備は進みましたが、市役所のICT化も見直した方がいいのではないですか。

岡良治（教育研修課長）

そうですね。

【ビデオ上映】

岡良治（教育研修課長）

これは、小学2年生の図工の授業です。友達の作品を写真に撮って、クイズ形式で、これはどういう作品か、というのを紹介するというものです。

小学2年生でも、このようにタブレット、ロイロノート（学習支援ソフトの名称）を使いこなしています。

こちらは小学6年生の国語科です。考えを整理しているところです。ロイロノートにあるシンキングツールを使って授業を進めています。

子供たちに使用した感想を聞いていますので、聞いてください。

西村早人（教育研修課主幹・映像）

今日、タブレットを使って学習をしていましたけれど、タブレットを使ってよくなったな、と思うことはありますか。

女子児童A（映像）

ノートにまとめるときに、タブレットのペン図を使うとまとめやすくなります。

西村早人（教育研修課主幹・映像）

逆に、不便だな、と思うことはありますか。

女子児童A（映像）

ダウンロードするときなど、時間がかかるときがあります。そのせいで、授業の時間が短くなることがあります。

西村早人（教育研修課主幹・映像）

最後に、これからタブレットを使って、どんな学習をしていきたいと思いますか。

女子児童A（映像）

みんなで、タブレットで、いろんな人の意見や文書を見て、それを自分のものにできたらいいな、と思います。

西村早人（教育研修課主幹・映像）

ありがとうございます。頑張ってくださいね。

教員A（映像）

性格上、おとなしい子供とか、意見の言えない子供とか、いるんですが、そういった子供の意見もどンドン拾うことができ、みんなの考え方が深まったり、広がったりするところがあります。

西村早人（教育研修課主幹・映像）

逆に、いま困っていることや課題だと思うところがありますか。

教員A（映像）

私自身、タブレットでどんなことができるか、ということ、まだまだ不勉強なところがあって、授業の中でどんなことに活用できるかということ、勉強していきたいと思っています。

西村早人（教育研修課主幹・映像）

ありがとうございました。

岡良治（教育研修課長）

小学6年生の社会の授業の様子です。国会について学習したことをまとめて発表しようという場面でタブレットを活用しているものです。

中には、キーボードを使って入力をしている子供もいます。

これは、互いに教え合って学習を進めています。

資料を写真に撮って、データとして取り込んでいる様子です。

これは、蓋井小学校が吉母小学校とタブレット端末を使って、リモートの討論会を行っている様子です。

蓋井小学校は、5年生が1人なのですが、こうやって意見を交わすことができる機会がもてています。

これは、また別の学校で6年生の算数の授業の様子です。教員から児童のそれぞれのタブレットに送られたデータをもとに自分の考え方をまとめています。自分の考え方を電子黒板を使って共有し、説明をしています。

これは体育の授業風景ですが、お互いの動きをタブレットに動画として記録し、それを繰り返し視聴することで、自分の動きを確認しているところです。

児童にタブレットを使った授業の感想をインタビューしていますので、お聞きください。

女子児童B（映像）

私は、発表が苦手な人や、声が小さい人でも、気軽に考えを伝えることができるので、いいと思います。また、話したことのない友達の考えもよくわかるので、とてもいいと思います。

女子児童C（映像）

タブレットがあると、1人の意見だけではなく、いろいろな人の意見が一瞬でわかります。紙のノートは拡大するのに、プロジェクターなどの機械が必要ですが、タブレットが1人1台ずつあるので、とても準備が楽になりました。

男子児童D（映像）

体育で、運動会の練習をするときに、毎回、先生の動きを見て覚えなければいけなかったけれど、タブレットを使って友達に動画を撮ってもらって、自分がどこができていないかを確認することができるので、すごくいいと思います。

女子児童E（映像）

タブレットは、発表が苦手な人でも簡単にできるし、ノートは書くのが簡単なので両立しています。

教員B（映像）

一つ課題を挙げるとすれば、ミラーリングをしているときなどに、突然切れてしまったり、他のクラスの電波が干渉して、他のクラスの授業の映像が流れてしまったりすることがあります。そういった環境が、きちんと整えばいいなと思います。

岡良治（教育研修課長）

中学校の国語の授業の様子です。最終的なまとめをタブレットで入力して、それをクラスの全生徒の互いの記述をタブレット上で確認することができます。

これは、中学校の理科の授業風景です。

教員C（映像）

特徴を捉えた写真を撮影して、「ここがこうなっている」という説明を加えて、4つの象限のどこに分類されるのか、というところまでの作業をしてください。この①は「ここに注目したよ」「ここがこんな感じになっているよ」だから分類上、ここにくる、という説明を書き加えてください。分類し終わったら、このボタンをタップして「提出」をしてください。

岡良治（教育研修課）

いまの説明を受けて、実際に生徒がタブレットを使って、考えをまとめ、その結果を教員に提出し、これらのデータを生徒全員で共有することもできますし、加工・編集することもできます。

はい、以上のような状況です。

前田晋太郎（市長）

いやあ、すごい時代になったな、と思いますね。信じられませんね、学校でこれだけのことができるなんて。私もびっくりしました。ここまでのことが行われているとは知りませんでした。どうですか、皆さん。ご意見でも、感想でも何でも結構ですよ。はい、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

私も、正直、びっくりしました。でも、うちの2歳の孫でも、テレビ画面をスワイプしてますから。もう、私たちの時代からすると、考えられない状況になっているんだな、と思っていますし、重たいランドセルを背負って学校に行くということ自体が、いまやナンセンスといわれている時代ですから、そこはタブレットを一つ学校に置いておいて、必要最低限のものを学校に持って行けばいいようにすべきと思いますし、見てて思いましたが、置いてけぼりの子供がいないようにしなければいけないのかな、と感じました。そこは、やはり得手不得手というのがあるでしょうし、得意な子はどんどん先に行って、要はプログラミングをしたり、システムを自分で作ったりとか、する子も中には出てくると思うんですね。まだまだ下関の子供たちは、タブレットに初めて触れたという子も多くいると思いますので、IT格差が生じないようにしなければいけない、というのが今後の我々の課題かな、と思います。

もう一つ、先生方にも、そういった格差が出てくるのかな、と思います。そちらの方も課題となると思います。

前田晋太郎（市長）

ありがとうございます。置いてけぼりのないようにしないといけないと思いますし、私も動く映像を見ることで吸収スピードを高めることができる反面、書くことは減ってしまうのではないかと、思っていて、学習の中で覚える、定着させる点において、書くことは非常に重要だと思っていて、そのあたりのバランスのベストミックスができればいいな、と思っています。

皆さんは、いかがでしょうか。はい、藤井委員。

藤井悦子（教育委員）

ビデオを見せていただきまして、本当に進んでいるのがよくわかりました。やっている子供たちを見ていると、どうしても姿勢が前のめりになっている、というのをすごく感じます。長時間、集中して画面を見ることになるので、健康面の問題が生じないか、ということをお気をつけていただいて、しっかりと学習効果が上がるように取り組んでいただきたいと思います。

前田晋太郎（市長）

動画をずっと見続けると、確かに具合が悪くなります。そういった点にも注意をしていただければと思います。

どうですか、小田委員。

小田耕一（教育長職務代理者）

ビデオの準備、ありがとうございました。私たちも、動画を見ることによって一目瞭然ということで、ICTを活用することによって理解が進むということをも身をもって体験しているわけです。

先程、お試し期間であるとの説明をいただきましたが、順調に導入が進んで、活用につなげていっていただいていると思います。子供たちが発想を膨らませてくれることを願っています。

また、先生から「活用の仕方を探っていきたい」との発言がありましたが、子供たちもどんな活用ができるのか、考えていくと思いますし、あくまでも、これはコミュニケーションと情報伝達のツールであるということをお忘れずに、市長もおっしゃいましたが、考える力とか、学ぶ力というのが定着しているかどうかということを見つめていく必要があると思います。

こう考えたときに、どういう指標を持って見ていくのがいいのか、ということも考えていかなければいけないと思いました。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。はい、吉村委員。

吉村邦彦（教育委員）

3月末現在で、教育用のパソコンが、全国平均でいくと5.4人に1台、無線LANの整備率が41%、30Mbps以上の通信配線接続率が93.9%、大型提示装置普及率が52.2%ということなので、下関市の方が進んでいるといえると思います。

普及が進んだということはスタートラインであって、小田委員が言われたように、それをどう活かしていくのか、ということが大事ですし、そこを我々ももっと深掘りしていかなければならないと思っています。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございます。佐々木委員、どうぞ。

佐々木猛（教育委員）

ビデオ、ありがとうございました。私も、ここまで進んでいるとは思わなかったので、すごいなと思いました。私が、いまの小学生と同じように学校での学習をすることができていたら、もっと賢い人間になれていたのではないかと、思います。確かに、子供の方がタブレットの扱いには順応できて、ビデオの中でもありましたが、子供同士が教え合っているところ、ここが一番大切なおところではないかと、思います。だから、先程のいじめの問題でもありましたが、これがいじめにつながらないように、これが友達同士、同じクラスで教え合うということが、先程の生き抜く力の学びの部分につながってくるのではないかと、思いました。ICTって、このように使えたらいいな、という理想のビデオではないかと思いました。まだ、ここまで到達していない学校も多くあると思います。我が子は、下関商業高等学校に在学していますが、まだICTを活用した授業が行われていません。先生から「まだできないので、ご理解ください」とお詫びがありました。一番気になっているのが、机の大きさに対するタブレットの大きさです。加えて、キーボードを置いたら、教科書を置けるスペースがなくなってしまうのではないかと、ということです。そのときに、万が一、タブレットを落としてしまったときのフォローというのが、どこまでできるのか、というのが気になりました。以上です。

前田晋太郎（市長）

はい、ありがとうございました。

いい時間になりました。本当に、皆さん驚いたということで、その驚きも、割と好意的に受け止めていただいたということです。その中で、課題をいかに捉えて、現場の人たちが一番わかっていると思いますが、適切な方向性を導いていくことが必要だと思っています。

私も、執行部側の人間としては、ものすごくお金がかかるわけです。とんでもないお金がかかるのですが、一過性のものであれば、ある意味いいのですが、これが未来永劫続いていくわけです。この先、更新の問題もあるし、有料のソフトやアプリの導入が必要となるなど、いろいろと心配があります。

これを継続的な取り組みとしていくために、どういった取り組みが必要なのか。カバーもしっかりとつけてくれていたので、安心しましたけれども、4年たったら、今回と同様の経費が必要になってくると思うと、大丈夫だろうかと思っています。

そういったことも含めて、教育委員会の皆さんには、モノを大切にするというのも、しっかりと子供たちに教えていっていただきたいと思っています。

教育長、なにかございますか。

児玉典彦（教育長）

市長がおっしゃられたとおり、タブレットも将来的には、ランドセルと同じように、おうちで購入するのか、そういう議論も必要になってくると思います。いまから議論をしておくことも必要かなと思います。小学1年生から中学3年生まで1人1台のタブレットを渡しました。ワクチンに置き換えて考えると、治験を行わずに大規模接種に踏み切ったようなものです。慎重に今後の様子を見守っていかなければいけないと思っていますし、特に低学年の子供たちの使用状況については、過度な負担がかからないように調査をしながら、普及に努めていきたいと思っています。

前田晋太郎（市長）

そうですね。更新時には、予算を確保できるように、家庭の自己負担が出ないように頑張っていきたいと思いますが、今後の社会情勢等もしっかりと見ていきたいと思っています。

次回の総合教育会議においては、このあたりの具体的な方策について協議していけたらと思います。次回の開催は11月ということで、学校においてもタブレットの使用に慣れてきている頃だと思いますので、使用状況について、また報告をしていただこうと思っています。

本日は、多岐にわたって、幅広い御議論をいただきました。フリーなトークだったので、有意義だったと思いますし、改めて私も総合教育会議の大切さを実感いたしました。たった年2回の会議ですが、教育委員の皆さんにも、日頃からこれらの取り組みに注目・注視していただいて、またご意見、ご提案をいただければと思います。

【その他】

前田晋太郎（市長）

その他、何かございますか。よろしいですか。

それでは時間となりましたので、このあたりで本会を閉じたいと思います。

これからも、引き続き下関の子供たちの教育、学びの街・下関の実現に向けてお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

進行を事務局に戻したいと思っています。

【閉会の宣告】

徳王丸俊昭（教育部長）

皆さん、大変お疲れ様でした。それでは以上をもちまして、令和3年度 第1回 下関市総合教

育会議を終了いたします。ありがとうございました。

(ありがとうございました)